

## 光と陰

物事には、必ずといって良いほど光と陰、表と裏、メリットとデメリットがあるものです。いきおい私たちは、この二律背反する事態に戸惑い、悩むことがしばしばです。

最近のニュースを見ているとそのことを強く感じます。

まず、現在札幌市が導入しようとしている「公契約条例」について考えてみます。

この条例は、「市発注の公共工事や業務委託を請け負う企業に、条例で定められた基準以上の賃金を労働者に支払ってもらう」ということを内容とするものです。公共事業経費の削減が労働者の賃金にもしわ寄せが及び、「官制ワーキングプア」という言葉さえ飛び交っている中、労働者の側からすれば歓迎すべき内容といえるでしょう。

一方、札幌建設業協会、北海道ビルメンテナンス協会、北海道警部協会の3団体は、この条例に反対しています。反対の理由は、賃金を引き上げることによる経営への影響に加え、同じ仕事をしているのに条例の対象になるか否かで賃金格差が生じることは新たな不公平を生み出すことになるというものです。

札幌市としては、「公契約条例」によって公共事業に関わる者だけでなく、全体の労働者の賃金の引き上げに繋がることを期待しているのかもしれませんが、現実には非常に厳しそうです。

次に、厚生年金適用条件の拡大について考えてみましょう。

厚生労働省は、パート従業員らの厚生年金適用を拡大するため、適用条件を「労働時間週30時間以上」から「週20時間以上」に引き下げた上「従業員300人以上の企業で働く年収80万円以上の人」を対象とする方針のようです。これが実現すれば、より多くの人々に、手厚い年金が保障されることになります。

しかし、従来は、例えば夫の扶養家族のため掛け金を負担していなかった人にしてみると新たな自己負担が生じるので、その分、パートとしての手取り収入が目減りするということになってしまいます。将来の年金もさることながら、今の暮らしをどうするかは非常に大きな問題です。

更に問題を大きくしているのが、保険料の企業負担です。厚生年金というのは、必要な財源を労使折半で負担していますので、大量のパートを抱えている事業所にとっては、加入者が増えるということは新たな費用負担を強いられることとなります。企業側の負担の状況によっては、パート労働者の雇用機会自体にも影響が生じる恐れがあります。

次に、札幌市における児童クラブ有料化計画の修正について考えてみましょう。札幌市の計画では、児童クラブについて、現在「小学校1～4年生を午後6時まで無料」で預かっているものを、ことしの4月からは「対象を5年生にまで拡大し開設時間も1時間延長して午後7時まで」とする一方、運営経費として「午後5時以降の利用者に限って3000円を負担」してもらおうこととしていました。これに対して、議会から「今まで6時まで無料だったのに5時から有料にする理由が分からない」などといった異論が噴出したため、実施時期を先送りすると共に利用料金を引き下げることにしたとしています。

共働き世帯が増えている中、子どもを社会全体で育てていこうという考え方からすれば、児童クラブの運営を午後6時から7時まで延長することは、当然必要な措置であり、このことに異論を唱える人はいないと思われます。

ただ、こうした公共サービスにはコストが掛かります。そして、これをどのように負担していくかが大きな問題です。ともすると公共サービスは無料が当然と考える人もいるでしょうが、無料にするということは、必要な経費は税金で賄うということでもあります。それは、子どもを預けていない人からも負担させるということと同じことですから、それで良しとするか否かは、市民の皆さんのコンセンサスの問題ということになります。

児童クラブは、現在無料で運営されていますが、そもそも無料とすることにした理由は如何なるものだったのでしょうか。

最後に、ハーグ条約の加盟問題について考えてみましょう。

ハーグ条約というのは、国際結婚が破局するなどした後一方の親が子を無断で国外に連れ出した場合、元の居住国に戻すことを定めたものです。

日本は今までこの条約に加盟していませんでしたが、欧米諸国から加盟を強く求められており、また、国際結婚が増えるに従って子どもを巡るトラブルも増えており、ハーグ条約加盟に向けた法整備が急がれています。

基本的に、日本が国際ルールに従うことは必要な判断だと思いますが、国内では賛否が分かれています。加盟すれば、子を連れ去られた親は子を手元に戻しやすくなるということで、積極的に賛成する方がいる一方、例えば夫の暴力から逃れるために子連れで帰国した女性が、ハーグ条約に加盟すると親子が引き裂かれるのではないかとの懸念から反対の声を上げています。親権に対する考え方には国民性の違いもあり、問題を難しくしています。

以上、幾つかの事例を挙げながら問題の一端を考えてみました。いずれも自分の立つ位置、目線、切り口によって、選択する方向や答えが変わってきます。

どういう選択をする場合であっても、まず考えなければならないことは、左右の意見を足して2で割るといような発想ではなく、本質を見失わずに、デメリットや暗の部分、更にはリスクに対する配慮と手当を怠らないということです。(塾頭 吉田 洋一)